

学校教育目標		志を持ち自ら考え行動できる生徒の育成		重点目標	自分の考えを相手に伝えることができる生徒の育成			
重点目標	評価計画			自己評価		学校関係者評価	改善計画	
	目標達成のための方策(取組指標)	成果指標	評価	結果(成果○と課題△)		コメント	次年度における改善策(案)	
重点目標	学ぶ意欲の向上と基礎・基本の定着	見通しを持たせるような「めあて」の工夫と「わかる」「できる」を実感させるような「まとめ」の工夫	学習アンケートで「めあて」をもって学習し、授業の「まとめ」を理解している生徒が85%以上(結果 80%)	3	△授業の「まとめ」に対する十分な理解に課題が見られる。	B	○学校の自己評価は上方修正してもよいと思う。 ○主体的な学習となるように「めあて」の設定を子ども自身の気づきから設定する。 ○学力向上に向けて、小中学校で連携した具体的な共通実践項目を設定した取組が必要である。 ○成果指標に対する達成率なので90%を超えている項目の評価は「4」にしてよいと思う。 ○偏差値等の数値で計測できない非認知能力もあり、学力を総合的に捉えることも重要に思う。	○子どもの思考を大事にした「めあて」を工夫し、最後に「まとめ」として確認し、家庭学習につながるような取組を継続していく。 ○基礎基本に関しては、繰り返し学習することを意識付け、授業の中や補充の時間を設定して、実施していく。 ○自分の考えをまとめ、友達と意見を交流する場を設定して、考えを広げたり、深めたりしながら、学ぶ意欲につなげる。
		生徒の学ぶ意欲を喚起する導入、発問の工夫	生活アンケートで「学校での勉強が楽しい」と答えた生徒が80%以上(結果 79%)	3	△勉強が楽しいと答えた生徒が7割強で、昨年度よりも減少している。	B		
		自らの考えを発表したり意見交換したりする場の設定	学習アンケートで「自分の考えを書いたり発表したりしている」と答えた生徒が80%以上(結果 77%)	3	△自分の考えをまとめて、伝える工夫が必要である。	B		
		補充学習や繰り返し学習による継続的な取組	学習アンケートで「家で宿題や復習をしている」「1Pノートを毎日提出する」と答えた生徒が80%以上(結果 81%)	4	○毎日の取組や専門委員会の取組が成果につながったと考えられる。	A		
に 関 す る	学校行事や体験活動の充実	ESDの視点に立った教育活動と実生活を結びつける指導の工夫	各学年ごとの計画に沿って、体験活動を充実させる。(実態や生徒の姿から)	4	○各学年の体験活動が定着して、地域や職場や施設などとのつながりを感じられるようになってきた。	A	○ESDの視点に立った教育活動が推進されていることが、生徒の姿として表れている。 ○生徒会を中心とした縦割り活動を学校行事の中で多く取り入れ、自己存在感を高める工夫をする。 ○再編に伴って学級数も増えるが、各学年の体験活動を継続し、地域とのつながりや各職場とのつながりを通して3年間を通して、自分の進路も考える機会にする。	
		協働意識や他者肯定感のある異年齢集団の活用と縦割り活動	行事アンケートで「充実感や満足感を味わえた」と答えた生徒が90%以上(結果 84%)	3	○体育会・ミュージックフェイト等の行事を通して、学年を超えて交流をすることができた。	B		
		活躍する場面や自己存在感を高める場の設定	生活アンケートで「得意なことや自慢できることがある」と答えた生徒が80%以上(結果 78%)	3	△様々な「ひと、もの、こと」との関わりの中で育成していく必要がある。	A		
		認め合う人間関係を築き、自己有用感を感じる報告活動の充実	生活アンケートで「みんなの役に立っている」と答えた生徒が70%以上(結果 74%)	4	○学校行事等、人との関わりの中で、自己存在感を確認できるようになってきた。	A		
評 価	学習の基盤となる力の育成	チャイム席、挨拶等学習規律の確立	学習アンケートで「チャイム席が守れている」と答えた生徒が90%以上(結果 89%)	3	○学校生活の中では、チャイムを意識して行動することができるようになってきた。	B	○学校の自己評価は上方修正してもよいと思う。 ○夢を持っている生徒が多いのは素晴らしい。それを達成する学習意欲の向上につながる指導の工夫を期待する。 ○自制心ややり抜く力を「ノートに書く」習慣で身につけさせるとよいと思う。 ○時間を守ること、将来に夢を持たせることは大切である。 ○ノートには重要なことだけ記録すればいいと思う。	
		学習スキルの習得と授業の基本を意識した指導の実施	学習アンケートで「板書の内容をノートに写している」と答えた生徒が90%以上(結果 89%)	3	△学習の基本を押さえ、授業に集中させる必要がある。	B		
		キャリア教育の視点に立った体験活動の充実	質問紙「将来の夢や目標を持っている」と答えた生徒が80%以上(結果 84%)	4	○総合的な学習の時間など様々な体験活動を通して、働くことの意味について考えることで、自分のこととして捉えることができるようになってきた。	A		
い じ め 防 止	いじめ防止対策の推進	学校行事や体験活動との関連を図った道徳教育の実施	質問紙「いじめはどんな理由があってもいけないことと思う」と答えた生徒が90%以上(結果 95%)	4	○道徳の時間などの授業実践の工夫が効果的だった。	A	○生活・いじめアンケートを定期的に行い、職員間で情報を共有しながら、早期発見・早期対応に努め、いじめの未然防止につなげる。 ○道徳の教科化を視野に入れ、道徳教育の充実を図っていく。	
		生徒会活動によるいじめ防止の取組	生徒会を中心とした呼びかけ(いじめストップ標語やポスター作成)を活性化させる。	3	△いじめ防止の標語やポスターなど、今後も取組の工夫が必要である。	A		
		生活・いじめアンケートによる早期発見・早期対応	生活アンケート「学級でほっとしたり、楽しい気持ちになる」と答えた生徒が90%以上(結果 86%)	3	○行事等を通して学級内に信頼できる人間関係ができてきている。	B		
不 登 校 防 止	不登校解消に向けた組織的対応	米生・勝立中校区の円滑な接続を目指した小中連携	再編を視野に入れ、小学校との情報交換・合同研修会等を年間3回実施し、中1ギャップの解消を目指す	3	○6校交流合同研修会を実施することができた。今後は、さらなる小中連携を進める必要がある。	A	○不登校生徒の家庭との連携を強化し、生活環境等の改善に向けて関係機関や医療機関とのつながりを深めていく。 ○小中連携を一步進めて、授業や生徒指導面で協働して取り組み、中1ギャップの解消に努めていく。	
		受容的・共感的態度で臨む教育相談	生活アンケートで「先生はあなたのよいところを認めていると思う」と答えた生徒が85%以上(結果 83%)	3	△今後も、生徒一人ひとりに対し、受容的態度で臨む工夫が必要である。	B		
		不登校・不登校傾向生徒の情報の共有化	早期対応、マンツーマン対応、SCの活用等関係機関との連携 通常学級に在籍する生徒の個別の指導計画3名分作成	3	△早期対応、マンツーマン対応、情報交換等行ってきたが、学年によっては、不登校生徒の改善に十分につながらない一面もあった。	A		

◇ 評価について  
 ・【自己評価】 4:目標達成(90%以上) 3:ほぼ達成(70%~90%) 2:もう少し(60%~70%) 1:できていない(60%未満)  
 ・【学校関係者評価】 A:自己評価は適切である B:自己評価は上方修正すべきである C:自己評価は下方修正すべきである